

1. 学園夢企画提案書 (学部生・大学院生用)

A-1票

1) チームの名前	工学院大学創立125周年 学生企画実行委員会 (ミツバチプロジェクト)			
2) チームリーダーの名前	専攻・学部・学科・コース	学年	学籍番号	顧問の名前
長沼 暁介	応用化学科	2年	B410113	張谷 優太
b410113@ns.kogakuin.ac.jp 3) 企画目的	<p>養蜂を通して自然の生態系とミツバチの関係の重要性を学ぶ。大学内外へ広く活動する。</p> <p>ミツバチと食餌の関係、蜂蜜を含むミツバチ由来の生産物を生産する中で、多彩な植物と共生するミツバチの生態と生活を学んでいく。特に、学科を問わず多くの学生がこのプロジェクトに参加してもらい、学科間の交流をもつこと、学科の特色を活かせるような活動をしていく。</p> <p>将来的な就業先、採取した蜜などの成分を調べ、研究に活用していくことも視野に入れている。</p>			
4) 企画内容	<p><u>石壁区</u> 養蜂を行うには、環境が重要となる。必要不可欠な知識地帯は、新宿区八幡町周辺の、新宿御苑などがあり、元はミツバチの行動範囲内であることが、養蜂を行う事及び理由となる。</p> <p><u>準備</u> 現在、暮らす自然環境が減少し、蜂蜜の採取量が少なくなっている。そこで、蜜源植物を調べ、ミツバチがうまく生活していきける環境にしていく活動を行うと共に、ミツバチの講習会への参加や、専門家の話を伺い、基礎知識を身に付けていく。</p> <p><u>活動</u> ミツバチの生態と生活を観察し、学ぶ。理科教室などで発表会を開き、ミツバチの自然環境への貢献がどのくらい重要であるかを伝えていく。また、養蜂に慣れ、蜂蜜の採取量が安定した上で、建築学部の方と協力して、手作り巣箱をつくり、実践を行う予定である。</p> <p><u>将来的活動</u> プロジェクト開始後、応用化学科の山田孝久教授へは、衛生管理を、木山昌業師へは、木箱物の知識とノウハウ、木箱の修理のプロジェクトリーダーである教授の協力も厚く、お話し、お話し、お話しとステップアップしていく。例えば、蜂蜜の花をメインとしたミツバチの採取、成分分析などがある。また、同様に養蜂を行う、他大学の方と交流していく予定である。</p>			
5) 到達目標	<p>養蜂を通して自然の生態系とミツバチの関係の重要性を学ぶ。大学内外へ広く伝えていく。この活動を行うことで、少しでも多くの人にミツバチは自然の生態系で欠かせない存在であることを知ってもらおう。また、色んな学科の学生が参加することで、学科間での交流が与えられ盛んになる。</p> <p>以上、学科の特色を活かし、協力しあう事で、新しい発見を見出すことを期待できる。</p>			
6) 活動日程	<p>其月末テスト終了後、1,2年生で集まり、養蜂の知識、プロジェクトチームの組織構築、活動内容を決めていく。年間を通して活動を行う。</p>			
7) 活動場所	新宿校舎 屋上。			

[N0.3]



3. 学園夢企画チームメンバー表 (学部生・大学院生用)

B-1票

1) チームの名前	工学院大学創生125周年学生企画実行委員会			
2) チームリーダーの名前	専攻・学部・学科・コース	学 年	学籍番号	チームでの役割
長沼 瞭介	応用化学科	2 年	B410113	委員長
3) メンバーの名前	専攻・学部・学科・コース	学 年	学籍番号	チームでの役割
① 稲葉 恵梨子	応用化学科	2 年	B410017	総副委員長
② 鈴木 拓斗	応用化学科	2 年	B410086	企画
③ 高橋 甲	応用化学科	2 年	B410097	広報
④ 篠田 典宏	応用化学科	1 年	B411129	広報
⑤ 荒木 里紅	機械システム科	1 年	A211005	渉内
⑥ 蒲田 恭平	応用化学科	3 年	B409039	
⑦ 福本 崇彦	機械システム	3 年	A109128	
⑧ 宮奈 光一郎	応用化学科	3 年	B409125	
⑨ 山崎 徳和	応用化学科	3 年	B409134	
⑩ 岩本 巧	応用化学科	3 年	B409017	
⑪ 武村 美希	応用化学科	3 年	B409082	
⑫ 三井 綾乃	応用化学科	3 年	B409123	
⑬ 丸山 紗世	応用化学科	3 年	B409121	
⑭ 角森 玄	応用化学科	3 年	B409090	
⑮ 五十嵐 公汰	応用化学科	3 年	B409006	
⑯		年		
⑰		年		
⑱		年		
⑲		年		
⑳		年		

[No.6]